

第46回
福島県中学校長会研究協議会
県中県南大会
報告書



石都々古和気神社／石川町

と き 平成30年10月12日（金）
と ころ 母畑温泉「八幡屋」

目次

◇ あいさつ	福島県中学校長会長	伊藤 隆幸	2
	県中県南大会実行委員長	阿部 博	3
	福島県教育委員会教育長	鈴木 淳一 様	4
◇ 来賓祝辞	石川町長	塩田金次郎 様	5
◇ 大会要項	6
◇ 分科会記録				
	第1分科会	8
	第2分科会	10
	第3分科会	12
	第4分科会	14
	第5分科会	16
	第6分科会	18
	第7分科会	20
	第8分科会	22
◇ 写真記録	24
◇ 編集後記	26



あいさつ



福島県中学校長会 会長 伊藤 隆幸

第46回福島県中学校長会研究協議会県中県南大会が、阿武隈地域の豊かな緑と清らかな水の流れなどの美しい自然に包まれ、長い歴史と伝統を受け継ぎながら石川地方の中心として発展してきたここ石川町において開催できますことは誠に喜ばしく、全会員の皆様方とともに心から喜び合いたいと思います。

また、日頃より本県中学校教育の充実・発展のため、特段のご指導並びにご支援をいただいておりますご来賓の皆様方にご臨席を賜りましたことに、厚く御礼を申し上げます。

さて、隔年で開催されておりますこの研究協議会は、中学校長会単独の開催としましては一昨年のいわき大会での開催に引き続きの2回目の開催であります。校長の大量退職期に入り、今回の研究協議会には、昨年度、今年度に昇任等により校長として中学校にお勤めいただいている53名の先生方が初めて参加されています。このような時期に、県内の全中学校長が一堂に会するこの協議会の持つ意義は今後さらに重要になってくるものとなっていくと考えています。

平成30年度の研究主題は「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」であります。「生き抜く」ことが、クローズアップされたことになりませんが、東日本大震災及び原発事故の体験は、「生き抜く」ことの意味をあらためて問い質すことになり、特に、原発事故の被災県としましては大きな意義を持つものであると認識しております。

さらに、現在のわが国の社会は、知識基盤社会の到来と情報通信技術の急速な発展、社会・経済のグローバル化や少子高齢化の進展など大きく変化しています。今後、社会においては予測困難な時代と言われる状況の中、私たち校長には、教育の専門家として課題を正しく把握し、その解決に向けて新しい時代にふさわしい学校教育を創造していくことが求められております。本研究協議会において、有意義な協議、情報交換が行われ、校長の資質・能力を高める機会となることを心より願っております。

本大会には、校長自らの見識・資質等を高める研修の場として、「教育課程」「学習指導」「道徳教育」「健康・安全教育」「進路指導」「生徒指導」「教職員研修」「経営課題」の8分科会があります。研究協議を通して互いに高め合い、深め合い、その成果をそれぞれの支会や各学校運営に生かすことで、子ども達の「生き抜く力」の育成に寄与できればと考えます。

結びになりましたが、本研究協議会県中県南大会開催にあたりまして、ご指導並びにご支援を賜りました福島県教育委員会様、福島県市町村教育委員会連絡協議会様、石川町並びに石川町教育委員会様、県中県南地区の市町村教育委員会様、福島県小学校長会様、公益財団法人日本教育公務員弘済会福島支部様、一般財団法人福島県教育会館様に対しまして、心より深く感謝申し上げます。

そして、企画、準備等にご尽力をいただきました実行委員長の阿部博校長先生をはじめ役員・委員の皆様、石川・岩瀬・郡山・田村・東西しらかわ支会の校長先生方に対しまして、衷心より感謝を申し上げますあいさつといたします。

あいさつ



県中県南大会実行委員長 阿部 博

県内各地からご参集の会員の皆様、ようこそ石川町へお越しいただきました。

本日は、お忙しい中、福島県教育委員会教育長様、石川町長様、福島県中学校長会長様はじめ、多数のご来賓の皆様のご臨席を賜り、210名を超える会員をお迎えして、第46回福島県中学校長会研究協議会県中県南大会を開催できますことは、大きな喜びとするところであります。

また、70年記念式典に続いての研究協議会となりましたことから、前福島県中学校長会長の福地憲司様はじめ歴代会長の皆様にもご臨席をいただいておりますことは大変心強く、心より厚く感謝申し上げます。今後も福島県中学校長会に対しまして、温かいご指導を賜りますようお願いいたします。

さて、いわき大会から2年が経ち、東日本大震災からは7年6か月が過ぎました。臨時休業していた学校の再開や、新設校の立ち上げなど嬉しい知らせも届いておりますが、まだまだ復興は半ばであります。今後も、「学校は復興のシンボルであり、活力源である」という合言葉を大切に、福島の子どもの未来の希望である生徒たちのために、力を合わせて学校経営に真摯に取り組んでいかなければならないと思います。

このような中、本大会は「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」の研究主題のもと、8分科会に分かれて、各支会で研究した内容について協議し、共有し、今後の学校経営に役立てていくことを目的に行われます。

生徒一人ひとりが心身ともにたくましく、そして未来に希望をもち、確実に努力し続けることができるような教育環境を整えることが私たちに課せられた使命であると考えます。

一方、課題も山積しております。新学習指導要領の完全実施、数学を重点にした学力の向上、不登校の防止、県立高校入試改革への対応、急速に発展するAIへの対応など、課題解決を盛り込んだカリキュラムマネジメントの構築などが挙げられます。更に、我々教員に目を向ければ、管理職を含む大量退職者の問題から時代を担う管理職の育成、少人数教育の充実、新採用教員の指導力育成、定年退職の年齢の引き上げなどが挙げられます。これらの課題に対し、私たち中学校長が知恵を出し合い、努力をすることで、少しでも次の世代への指針となるものを残しておきたいと考えています。

今回の県中県南大会は5支会が協力して準備に当たってきました。とりわけ、岩瀬、石川支会の先生方には実行委員会の要としてご尽力いただきました。開催の準備には万全を期したつもりではありますが、県中県南地区は広域であるため何かと不行き届きのことがあろうかと思っております。どうぞ意のあるところを酌んでいただき、ご容赦願いたいと思っております。

結びになりますが、本大会開催にあたりご指導ご支援を賜りました福島県教育委員会、石川町、石川町教育委員会、福島県中学校長会、そして会場としてお世話をいただきました八幡屋さんほか、多くの関係者の皆様にご心より感謝を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

あいさつ



福島県教育委員会教育長 鈴木 淳一

第46回福島県中学校長会研究協議会県中県南大会が盛大に開催されますことをお喜び申し上げますとともに、中学校長の皆さんには、日頃より学校教育の充実、発展のために御尽力を頂き、心より感謝申し上げます。

さて、東日本大震災から7年半余りが経過しましたが、本県では未だ多くの子どもたちが避難生活を送っていることなど、今なお重い課題を抱えている一方、この4月には、新たに5つの町村において地元での小中学校の再開が果たされるなど、本県教育の復興は着実に歩みを進めています。

また、郡山市において県内初の義務教育学校となる「西田学園義務教育学校」が開校したほか、県内の小中学校に8人の副校長と16人の主幹教諭を配置し、学校の組織運営体制や指導体制の充実を図るなど、新たな取組が始まり、その成果も期待されているところです。

このような中、福島県教育委員会では、教育政策の骨太の方針である「頑張る学校応援プラン」に掲げた主要施策を推進し、本県教育課題の解決を図っているところですが、主要施策2「教員の指導力、学校のチーム力の最大化」にあるように、これからの学校は、学校教育を担う教員一人一人の資質能力を高め、地域と連携・協力して、「チーム学校」を実現することが重要です。また、教職員の多忙化解消に向けた取組は、学校における喫緊の課題でもあり、校長の強いリーダーシップと行動力、さらにはマネジメント力が今後ますます求められます。

本大会の主題でもある「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」は、本県の復興を担う人材を育成していく視点からも時宜を得たものであり、皆さんが日頃実践・研究されていることを持ち寄り、協議を深め、共有することにより、福島の未来を担う有為な人材の育成に、より一層力を発揮されることを期待いたします。

結びに、福島県中学校長会の益々の御発展と会員の皆さんの御健勝、御活躍を祈念いたします。あいさつといたします。

祝 辞



石川町長 塩田 金次郎

当石川町において、県内の中学校校長の皆様が一堂に会し、第46回福島県中学校長会研究協議会県中県南大会が、盛会に開催されますことは誠に喜ばしく、地元石川町を代表いたしまして、心から歓迎とお祝いを申し上げます。

また、校長先生方におかれましては、日ごろ中学校教育の充実・発展のためにご尽力いただいておりますことに、深く敬意を表するものであります。

今、全国で少子高齢化が急速に進行しております。また、グローバル化の進展や高度情報化の進展、中でも人工知能（AI）の飛躍的な進化など、今後、社会がますます急速に変化していく中で、我が国社会が公正で活力あるものとして持続的に発展していくためには、個人が自立して、また、自らを律し他と協調しながらその生涯を切り開いていく、「生きる力」を身に付けるための教育が必要になってまいります。それと同時に、命の大切さや、時には我慢する精神力、更には、人の心の温かさを感じとれる、ゆとりある気持ちを持たせる「心の教育」もより一層、求められてくるのではないかと考えております。

このような中、県内各地から中学校の校長先生がお集まりになり、「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」を大会主題とされ、研究協議されますことは誠に意義深く、本大会が今後の県内中学教育の発展・充実に、実り多い成果をもたらすことを、大いにご期待申し上げますところであります。

教職員の先頭に立つ校長先生方におかれましては、お一人お一人が、強いリーダーシップと柔軟な発想をもって、健やかで、たくましく、そして心豊かな福島の子どもたちを育んでいける学校づくりに、なお一層のご尽力を賜りますよう、お願い申し上げます。

結びに、福島県中学校長会のますますのご発展と、皆様方のご健勝、ご活躍を心からご祈念申し上げます、お祝いの言葉といたします。

平成30年度 第46回 福島県中学校長会研究協議会県中県南大会

- 1 大会主題 「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」
- 2 主 催 福島県中学校長会
- 3 共 催 福島県教育委員会 福島県市町村教育委員会連絡協議会
須賀川市教育委員会 鏡石町教育委員会 天栄村教育委員会 石川町教育委員会
玉川村教育委員会 平田村教育委員会 浅川町教育委員会 古殿町教育委員会
- 4 後 援 須賀川市 鏡石町 天栄村 石川町 玉川村 平田村 浅川町 古殿町
福島県小学校長会 日本教育公務員弘済会福島支部
- 5 期 日 平成30年10月12日(金)
- 6 会 場 母畑温泉 八幡屋 コンベンションホール 飛鳥 ほか
- 7 日 程

10:00 10:30 11:30 11:40 12:10 13:10 15:20 15:30

受付	福島県中学校教育 70年記念式典		開会行事	昼食 休憩	研究協議	閉会式
----	---------------------	--	------	----------	------	-----

- (1) 開会行事 11:40～12:10 進行 実行副委員長 高橋 秀章
- ① 開会のことば 実行副委員長 小玉 陽彦
 - ② あいさつ
福島県中学校長会長 伊藤 隆幸
大会実行委員長 阿部 博
福島県教育委員会教育長 鈴木 淳一 様
 - ③ 来賓祝辞
石川町長 塩田金次郎 様
 - ④ 来賓紹介 実行副委員長 永山 美雄
 - ⑤ 閉会のことば 実行副委員長 長場 壮夫

【昼食・休憩】12:10～13:10 全体会場 コンベンションホール 飛鳥

(2) 研究協議 13:10~15:20

各分科会会場

分科会名 小主題 会場	支会・発表校・発表者	司会者	記録者	運営委員	進行係
					会場係
第1小主題 教育課程 曙1	石川 古殿町立古殿中学校 相樂 正弘	岡崎 寛人 (須釜中) 宗像 達郎 (内郷三中)	島貫 条司 (野田中)	有賀 真道 (ひらた清風中) 草野 仁 (内郷一中)	齋藤 一成 (桃陵中)
	いわき いわき市立桶売中学校 大野 勝彦				草野 正夫 (玉川・泉中)
第2小主題 学習指導 曙2	郡山 郡山市立富田中学校 熊坂 洋	原 真児 (西田学園) 荒井 孝祐 (白河・東中)	渡辺 哲雄 (備前・諺中)	荻野 由則 (郡山三中) 大竹 宏之 (白河中央中)	加藤 芳宏 (松陵中)
	東西 白河市立五箇中学校 しらかわ 三森 浩晶				御代田進一 (常葉中)
第3小主題 道德教育 北須1	安達 大玉村立大玉中学校 鈴木 豊	橋本 公秀 (本宮二中) 岡崎 秀一 (裏磐梯中)	和田 節子 (飯館中)	糺田 惣男 (安達中) 星 裕次郎 (塩川中)	若松 真一 (勿来二中)
	耶麻 喜多方市立山都中学校 小島 靖				堂山 昭夫 (大越中)
第4小主題 健康・安全教育 北須2	福島 福島市立蓬莱中学校 齋藤 剛	二平 光明 (立子山中) 高瀬 永志 (広野中)	松本 修 (藤間中)	小針 伸一 (福島二中) 荒木 幸子 (檜葉中)	佐藤 忠一 (若松五中)
	双葉 双葉町立双葉中学校 目黒 信浩				佐藤 和芳 (白河南中)
第5小主題 進路指導 今出	田村 田村市立都路中学校 田中 淳一	吉田美智生 (滝根中)	金成 智子 (白沢中)	佐藤 和典 (三春中)	鳴原 俊洋 (浪江中)
					石川 政彦 (表郷中)
第6小主題 生徒指導 阿武隈1	伊達 伊達市立松陽中学校 佐藤 政俊	大木 修 (醸芳中) 吉田ひとみ (磐梯中) 本間 義和 (磯部中)	川上 一美 (入遠野中)	鈴木 昭夫 (伊達中) 歌川 哲由 (若松三中) 梅田 善幸 (原町一中)	佐藤 昭 (三島中)
	北会津 会津若松市立湊中学校 佐久間一晃				家久来三典 (三穂田中)
第7小主題 教職員研修 阿武隈2	岩瀬 須賀川市立仁井田中学校 湯田 公夫	佐浦 雅明 (天栄中) 長沼 敬貴 (下郷中)	菅野 浩智 (附属中)	高崎 則行 (須賀川二中) 馬場 俊忠 (田島中)	渡辺 亮恵 (鹿島中)
	南会津 南会津町立南会津中学校 小林 稔				小林 和文 (逢瀬中)
第8小主題 経営課題 石陽	両沼 会津美里町立本郷中学校 藤田 信一	武藤 成也 (高田中) 橋谷田 聡 (小名浜一中)	佐藤 信昭 (会北中)	板橋 健一 (坂下中) 大和田一成 (小名浜二中)	菊池 博基 (館岩中)
	いわき いわき市立湯本第一中学校 小泉 俊夫				佐藤 士郎 (守山中)

(3) 閉会式 15:20~15:30

各分科会会場

第1分科会(教育課程)「社会に開かれた教育課程」の編成・実施

【発表者】	古殿町立古殿中学校	相樂正弘	いわき市立桶売中学校	大野勝彦
【司会者】	玉川村立須釜中学校	岡崎寛人	いわき市立内郷第三中学校	宗像達郎
【記録者】	福島市立野田中学校	島貫条司		
【運営委員】	平田村立ひらた清風中学校	有賀真道	いわき市立内郷第一中学校	草野 仁
【進行係】	伊達市立桃陵中学校	齋藤一成		
【会場係】	玉川村立泉中学校	草野正夫		

1 発表の概要

(1) 石川支会の研究について

古殿町立古殿中学校 相樂正弘

「視点1：幼・小・中の学びの連携・接続を図る教育課程の編成・実施」「視点2：教員の資質・能力の向上」の2つの視点で研究を行った。

視点1では、小学生の中学校体験授業「フライデーコネクション」「すくすくジュピアプラン」「ふるどのコネクション」、特別支援学校との交流事業、中学生の小学校への出前授業「情報モラル教育」、幼・小・中連携読書活動など、視点2では、幼・小・中連携授業研究会「学び合いの授業づくり」、中学校教員の小学校への道徳の出前授業「議論する道徳」などの実践について具体的な説明がされた。

成果としては、生徒の中学校生活への意欲と豊かな情操及び表現力を養うことができたことと、教職員が自己の指導力向上の意識化が図られたことが挙げられた。課題としては、9年間の発達に応じた教育のカリキュラム・マネジメントと教員の資質・能力のさらなる向上が挙げられた。

(2) いわき支会の研究について

いわき市立桶売中学校 大野勝彦

「視点1：地域の素材の教材化」「視点2：地域の人的・物的資源の活用」「視点3：地域への貢献」の3つの視点で研究を行った。

視点1については、地域の自然や地質的特色・産業や歴史・偉人などについての調べ学習について、視点2では、特別支援学校との交流や、地域人材の特別非常勤講師としての活用事例、地域の諸施設（アンモナイトセンター、草野心平文学記念館）との連携について、視点3では、地域との合同運動会や敬老会の開催、伝統芸能「鬼ヶ城太鼓」の継承などの実践について説明がされた。



成果としては、「地域のために」という明確なビジョンを持つことで、校長のリーダー性の向上に繋がったことや、特色ある学校づくりの第一歩となったこと、「地域で子どもを育てる」意識が高まったこと、教員が地域を知ることで資質向上に生かされたことなどが挙げられた。課題としては、時間の確保や多忙感の問題、人的・物的・財政的支援の問題、人事異動のサイクルの問題が挙げられた。

2 質疑

(1) 石川支会の発表について

- ◇ (棚倉中より) 小中交流は単発に終わることが多いが、実際にどのくらいの頻度で行っているのか。
- 当初は年間20時間行っていたが、次第に整理されて、今は年3回くらいになっている。
- ◇ (棚倉中より) 道徳の出前授業について、議論させる道徳のための具体的な手立てはどうしているのか。
- 「気持ち柱」「心情円」「ロールプレイング」などの技法を取り入れて、いろいろな見方・考え方をする補助として活用している。

(2) いわき支部の発表について

- ◇ (内郷三中より) 地域への中学生のかかわり方のきっかけや具体例を教えてください。
- 町が学校に地域行事への協力を要請してくることが多く、それをよい機会として、町と相談しながら進めている。国際ボランティア活動をしている方を通してネパールへの支援なども行っている。

3 協議内容

(1) グループ協議の柱(視点)

- ◇ 幼・小・中の学びの連携・接続を図る教育課程やカリキュラム・マネジメント
- ◇ 職務の効率化や多忙感の解消に向けた校長の役割

(2) 各班の発表から

- 地域行事として長くやってきたものに加え、新たに地域等から連携の要望があり、多忙感が増す傾向にある。職員を納得させるリーダー性が求められる。
- 多くの中学校へ進学する小学校との連携や複数の地域と連携しなければならない大規模校では連携がむずかしい。
- ふるさとを学ぶことについての教員の

理解がないと、生徒の深い学びにはつな
がっていかない。

- 勤務時間外の仕事が増える分、負担感が大きく、校長としての配慮が大切。



4 まとめ

(1) 平田村立ひらた清風中学校 有賀真道

- 授業・部活動での連携が中心だが、情報モラルやキャリア教育など工夫次第で内容を広げていくことができる。
- 小中連携の回数が多いほど、子どもの不安は軽減する。中学校生活を理解することは中1ギャップの解消につながる。
- 連携がマンネリ化して当初の目的が分からなくなるといふことのないように、反省を生かして改善を図りながら実施することが大切である。アンケート等でニーズを把握することも有効である。

(2) いわき市立内郷第一中学校 草野 仁

- 校長は、教育行政の施策に精通するとともに行政と上手に連携していくことを意識する必要がある。
- 企業やNPO団体等からの支援を得るためのつながりを開拓することを心がけたい。
- 多忙化解消のためにも、既存の行事や活動をアレンジするなどして、新たな取組をするための時間を生み出す工夫をすることが大切である。

第2分科会(学習指導)「主体的・対話的で深い学び」の実現

【発表者】	郡山市立富田中学校	熊坂 洋	白河市立五箇中学校	三森浩晶
【司会者】	郡山市立西田学園義務教育学校	原 真児	白河市立東中学校	荒井孝祐
【記録者】	猪苗代町立吾妻中学校	渡辺哲雄		
【運営委員】	郡山市立郡山第三中学校	荻野由則	白河市立白河中央中学校	大竹宏之
【進行係】	福島市立松陵中学校	加藤芳宏		
【会場係】	田村市立常葉中学校	御代田進一		

1 発表の概要

(1) 郡山支会での取組について

郡山市立富田中学校 熊坂 洋

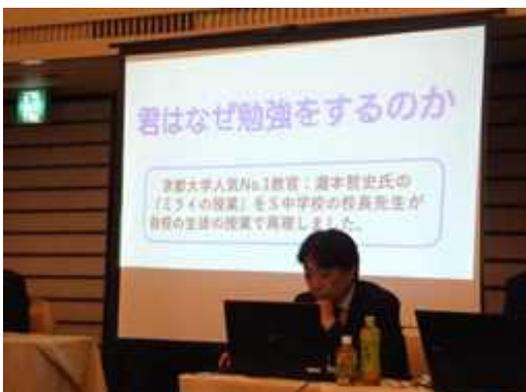
はじめに、S中学校長が実践した道徳の授業をもとに、校長自らの授業実践により「主体的・対話的で深い学び」の扉が開かれることを説明する。

次に、各種データをもとに、研究の趣旨、視点、研究の実際について説明する。

① 視点1の「主体的・対話的で深い学びの校長としての捉え方」について、支会での共通理解した内容を説明し、その考察を発表する。

② 視点2の「校長の直接的なアクション」について、5つの中学校での実践をもとに、校長による授業実践、授業参観シートの活用、校長室からの情報発信、生徒意識調査の実施・活用、学力向上対策委員会の取組について説明し、その考察を発表する。

最後に、課題として時間の確保や教員の意識改革について説明する。



(2) 東西しらかわ支会での取組について

白河市立五箇中学校 三森浩晶

はじめに、研究の趣旨、視点について説明し、その視点に沿って研究の概要について発表する。

① 視点1の「校内体制の構築と教育環境の整備」について、3つの中学校の実践をもとに、組織的な研究体制、地教委との協力による学習体制、授業スタンダード及び家庭学習スタンダードの活用について説明する。

② 視点2の「地域人材、地域資源を活用した学習課題の設定」について、S中学校の実践をもとに大豆プロジェクトやアクティブ・ラーニングの視点を生かした取組について説明する。

最後に、研究の考察を説明する。



2 質疑

(1) 郡山支会での取組について

◇ (鮫川中より) 現職教育との関わりについて

て質問があり、現職教育での提案授業の一つとして担任とのT・Tで行い、研究推進のきっかけ作りになったという回答があった。

(2) 東西しらかわ支会での取組について

- ◇ (月館中) 具体的な地域資源や人材発掘について質問があり、各地教委との連携により行っており、S中学校ではそれ以外に社会教育委員、公民館、物産館との連携を行ったという回答があった。
- ◇ (鏡石中) 発表にあった小学校との連携以外の例について質問があり、家庭学習計画の交換による家庭との連携について回答があった。
- ◇ (常葉中) 生徒アンケートの具体的な評価項目について質問があり、学習形態、活動時間、支援方法、使用教材等11項目であるとの回答があった。
- ◇ (大野中) 教職員グループ構成について質問があり、小規模校では教科ごとに推進するのが難しいので、教科を越えて理系、文系、実技系に分けているという回答があった。

3 協議内容

(1) 「主体的・対話的で深い学び」に関して、校長は職員に具体的イメージをどのように持たせたらよいか。

- ◇ (西田学園) 単元計画をきちんとやれば、自然にできると助言している。
- ◇ (久之浜中) 概念について職員と確認し、教師が意図して取り組んでいる。
- ◇ (四倉中) コミュニケーション能力を身につけることを意識して実践している。
- ◇ (西田学園) 「何のために授業をしているかについて、バックキャストを意識して考えること」が重要ではないか。
- ◇ (昭和中) 小規模校なので、教科横断的に他教科の先生が入ってT・Tを行っている。

◇ (富岡一中) 地域や民間など外部の人が入ると、少人数であっても対話的な学びは成立する。対話とは学びのやり取りと捉えて進めている。

◇ (東中) 内外教育に掲載された上智大学の那須先生の文献をもとに、「主体的・対話的で深い学び」について説明する。

(2) 授業の質的改善に向けて、校長は校内体制や教育環境をどう整備したらよいか。

- ◇ (東中) カリキュラムマネジメントをもとに開かれたチームでの提案を行った。
- ◇ (鏡石中) 小学校と連携できるものはないかと考え、生活ノートを共有化した。学びの系統性を考え、学習訓練や道徳の評価の統一化を行った。
- ◇ (東中) 他校とのネットワークを活用し、先生方に「あこがれの先生」を聞き、その先生の学校で1日研修を行った。教師文化の伝承が大切だと思う。

4 まとめ

(1) 郡山市立郡山第三中学校 荻野由則
校長は一人職で視野が広がりにくいので、2人の発表に感謝したい。客観的なデータをもとに、具体的な校長としてのアプローチの実例を示していただいた。

本校では「グループワークを行うのは当たり前、思考ツールなどを加える」ということを職員に提示している。

(2) 白河市立白河中央中学校 大竹宏之
両支会の先生方に感謝したい。郡山支会からはリーダーが積極的に関わるということ、東西しらかわ支会からは環境・体制を工夫するということを提案いただき、とても参考になったと思う。

学習指導要領は、様々な改訂の経緯があるが、これまでの教育実践をもとに工夫・改善していけばよい。過去の失敗のようにならないように私達がチェックしていく必要がある。

第3分科会(道徳教育)よりよく生きようとする意思や能力を育む道徳教育の充実

【発表者】	大玉村立大玉中学校	鈴木 豊	喜多方市立山都中学校	小島 靖
【司会者】	本宮市立本宮第二中学校	橋本公秀	北塩原村立裏磐梯中学校	岡崎秀一
【記録者】	飯舘村立飯舘中学校	和田節子		
【運営委員】	二本松市立安達中学校	糺田惣男	喜多方市立塩川中学校	星裕次郎
【進行係】	いわき市立勿来第二中学校	若松真一		
【会場係】	田村市立大越中学校	堂山昭夫		

1 発表の概要

(1) 安達支会について

「道徳教育の充実に向けた校長の関わり」をテーマに3つの視点から研究を進めた。

① 視点1：議論を通して多面的・多角的に考える道徳の授業の在り方

ア 校長が道徳科授業を実践。その後、教員が追試し、学校全体へ波及させた。

イ 学校の課題と関連付けて題材を選定し、問題解決的な授業を行った。

ウ 現職教育との関連を図るとともに、異校種や地教委と連携しながら進めた。

② 視点2：道徳教育推進教師を中心とした体制づくりと研修の充実

ア 中学校区小中連携協議会に道徳部会を設置し、道徳教育の充実に向けた体制を整備。評価の仕方、地域素材の活用等、小・中での共通実践内容を明確にした。

イ 道徳教育推進教師及び各学年の道徳担当教師を活用し、道徳教育アーカイブ、先進校の事例研究等、研修を充実させた

ウ 道徳教育推進教師が持ち回り授業等を行えるような環境をつくった。

③ 視点3：学校や地域の実態を踏まえ、家庭や地域と連携した道徳教育の在り方

ア 道徳と総合的な学習の時間を横断的に取り扱い、地域人材の活用を進めた。

イ 校長は学年と外部講師とのつなぎ役。授業への参加と地域へ発信を推進した。

ウ 地域人材の発掘や地域と連携した資料作

成等を通して、ふるさとへの誇りを育む道徳教育を推進した。

④ 成果(○)と課題(●)

○ 校長のリーダーシップによって、教育活動全体を通して行う道徳教育及び全面実施に向けた授業改善が進んだ。

○ 道徳教育推進教師が中心となって、研修や授業を組織的に行った。教員一人一人の意識の向上につながった。

○ 総合的な学習の時間との関連を図った地域人材の活用により、ふるさとへの誇りと自信を高めることができた。

● 道徳的な判断力、実践意欲等について客観的に分析することができなかった。

● 適切な評価の在り方について、具体的な実践にはまだ結び付いていない。

● 家庭や地域、異校種との連携を強化していく必要がある。

(2) 耶麻支会について

「これからを生きるための多様な価値観を育む道徳教育はどうあればよいか～教育活動における様々な道徳の実践を通して」をテーマに、3つの視点から研究を進めた。

① 生徒一人一人の実態と変容を把握するために、「自分のこと」と「道徳の時間」の2部で構成される「意識調査」を定期的実施した。

② 道徳の授業を進めるにあたって、全職員で、「新教育課程をリードする道徳教育」「知徳体の関係」「多面的・多角的に考え

る基本」等について共通理解を図った。

③ 全校道徳を年3回実施。職員全体の参加による指導案検討会を開催した。

④ 成果(○)と課題(●)

○ 「意識調査」によって、生徒一人一人の変容を理解するだけでなく、指導改善のための資料として活用することができた。

○ 全職員で共通理解・共通実践を図ったことにより、職員一人一人の道徳に対する意識の改革と変容が見られた。

○ 全校道徳によって、全校生が様々な考えに触れ、多面的・多角的な考え方や多様な価値観を育むことができた。また、全教員が授業者として参加することによって、協力しながら進めていくためのチームづくりが可能になった。

● 今後は、調査結果に基づいた、より具体的で効果的な指導方法についての研究を進めていく必要がある。

● 一人一人が明確な指導観をもって授業に臨めるよう研修を進めていきたい。

● 全校道徳を、計画的・継続的に実践できるようにしていきたい。

2 質疑

◇ (大信中より) 校長が道徳の授業を実践した時、題材をどのように決めたのか。

(大玉中) 生徒の実態を踏まえ、東京書籍の副読本の中から選定した。

◇ (若松一中より) 先行実施している学校の評価の仕方について。

(大玉中) 道徳教育推進教師を中心に進め、職員会議で検討している。

3 協議内容

(1) 道徳教育推進教師を中心とした体制づくりについて

◇ 資料の提供、授業の率先垂範、全校道徳、講話などを行っている。

◇ 指導主事が継続的に関わって、担当者を指導している。中学校区で題材を発掘して

いる。今後は小中連携を進めていく予定。

◇ 弁護士6人に来てもらって授業をしてもらった。

◇ 地域人材の協力により「一人一民話」を授業参観で語った。「ぐるっと湖南めぐり」を地域の人々とともにやっている。

◇ 情報を共有化する時間の確保が課題である。週の打ち合わせの中で道徳についても話し合ったり、授業アンケートの項目に道徳を入れたりしたい。

◇ 教員を道徳の研修会に参加させる。そのための予算を確保するのが校長の務め。

◇ 中教研の道徳部会の報告を職員会議で実施した。冒頭で必ず次のことを言うように指導主事から指示された。「あなたの発問、生徒の心に響いていますか」

◇ 実際に評価の文章を書いてみて意見交換をしてはどうか。

4 まとめ

(1) 二本松市立安達中学校 耕田 惣男

校長として、道徳教育の指針を明確に打ち出すことが重要である。それを踏まえて教員は授業を充実させる。一つの事象について、多面的・多角的に考えさせる。本田圭佑が朝鮮人学校で講話を行ったが、その内容は多面的な思考及び国際感覚を養うものであった。我々もそのような視点をもつ必要がある。

(2) 喜多方市立塩川中学校 星 裕次郎

自校では、道徳教育推進教師を中心に、国研の授業を皆で見ながら小グループで話し合い、授業や評価の研修を行っている。やらされ感ではなく、やりがいに結びつく実践にしたい。また、「変わること」と「変わらないこと」がある。「変わらないこと」は、全教科を通じて道徳教育を進めることと教師も子どもとともに価値について考えること。子どもを見取る力を教師につけていかなければならない。

第4分科会(健康・安全教育)体力の向上と生涯にわたって運動に親しむ資質・能力を育てる教育の充実

【発表者】	福島市立蓬萊中学校	齋藤 剛	双葉町立双葉中学校	目黒 信浩
【司会者】	福島市立立子山中学校	二平 光明	広野町立広野中学校	高瀬 永志
【記録者】	いわき市立藤間中学校	松本 修		
【運営委員】	福島市立福島第二中学校	小針 伸一	檜葉町立檜葉中学校	荒木 幸子
【進行係】	会津若松市立第五中学校	佐藤 忠一		
【会場係】	白河市立白河南中学校	佐藤 和芳		

1 発表の概要

(1) 福島市立蓬萊中学校 齋藤 剛

体力の向上と生涯にわたって運動に親しむ資質・能力を育てる教育の充実

【研究の趣旨】

東日本大震災及び福島第一原子力の事故から7年半が経過。①体力の低下②運動への取り組みの二極化③健康・安全に関する知識・理解の不足等の課題が見られる。

【研究の視点】

①～③の課題については、各校の実態に基づいた計画を立案する。

校長としての取組や関わりを明確にする。福島市内6校の研究実践を発表した。

【成果と課題】

体力の向上や心身の健康の保持増進について学校経営・運営ビジョンや教育計画に位置づけ、確実に実践することができた。家庭との連携をさらに強め、子供たちの健康課題に対応していきたい。

(2) 双葉町立双葉中学校 目黒信浩

学校や地域の実態に応じた、体力向上・健康教育の実践と校長の関わり

【研究の趣旨】

双葉地区の課題①生徒減少に伴う学校存続の危機にどう対応するか。②避難生活が7年半、学習環境や生活環境の変化にどう対応するか。③教員の指導力、意欲のさらなる向上をどう進めるか。

【研究の視点】

校長として、①「体力向上の取組」に関する働きかけ②「運動環境の整備」に関する働きかけ③「健康課題」に関する働きかけの3つの視点で研究実践をした。

【成果と課題】

これらの研究実践により、運動に意欲的に取り組む生徒が増えたり、チーム学校として学校課題に取り組めるようになったりした。また、組織を動かすためには、校長自らリーダーシップを発揮し、動く必要があることを確認できた。



2 質疑

(1) 生徒の生活習慣の乱れの改善について
◇(川谷中)C中学校では、メディアやネット端末の使用を制限する「家族ふれあいデー」を実施したり、家族とともに「弁当の日」を設定したりしたが、その実践の評価等はどうか。

(蓬萊中)メディアやネット端末の使用については、コース設定を選択させたが、楽なコースを選ぶ心配があるので、主旨を生徒にきちんと説明する事前指導を行って取り組んだ。弁当の日については、学校だよりで紹介したり、家庭科の授業での称賛をしたりするなどの取組であった。

(2) 健康課題に関する働きかけについて
◇ (立子山中) 活動量計を活用した取組について詳しく説明していただきたい。

(双葉中) 1台2万円前後で、町の消耗品費で購入した。歩数・運動量・睡眠量まで測定できる機器であり、自分自身の健康管理をすることを目的に使用している。ただ一部には家庭生活まで管理されることに抵抗感を持つ生徒も見られた。

3 協議内容

(1) 健康・安全教育において、全校体制で取り組むため、校長のリーダーシップのもと組織的な推進体制または体制の整備について

◇ (湯本三中) 体力向上のため、PKタイムとして清掃・学活終了後、全校生徒で15分校庭をランニングしている。また学期ごとに表彰も行っている。その結果、体力テストも年々向上している。教職員も一緒に参加して体力向上に努めている。マンネリ化防止のため、ゲーム的要素も必要かと考えている。

◇ (白河南中) 健康面の課題については養護教諭が提案するが、担当者任せにはしない。校長が朝会等で話をするすることで、生徒も健康面を意識する。学期ごとの発育測定では、体組成計を使用しデータ分析のもと、個別指導・全体指導を行っている。また、コーディネーショントレーニングを月1回実施し、体力向上だけでなく、小学校では学校生活の落ち着きも増したという報告もある。

◇ (金山中) 健康に関するそれぞれの活動をリンクさせることが大切であると考え。本校もスクールバスでほとんど歩かない。積雪時の登下校では歩くことがかえって危険である。冬の時期は、パワーアップタイムを実施し、全校生でサーキットトレーニングを実施している。

◇ (小高 堀川校長)

原発から20km圏内。スクールバスでの通学がほとんど。肥満率が高い。夏休み明けで10kgも太った生徒もいる。家庭との連携が

難しい。予算面については恵まれたところがあるので、校長のリーダーシップのもと、体制づくりが大切である。



4 まとめ

(1) 福島市立福島第二中学校 小針伸一

それぞれ各学校における健康・安全教育に実情が異なります。校長のリーダーシップのもと課題を解決していくことですが、支会として絞り込みができて、実践を共有できるような研究でありたい。校長としてどのように関わっていくことが大切です。また、教職員には自分の教科では何ができるか、自分の分掌では何ができるのかを話し合わせることで、内発的動機付けで学校課題に取り組ませることが大事です。そのために校長は、学校運営ビジョンで校長の姿勢を可視化することが必要になります。

(2) 檜葉町立檜葉中学校 荒木幸子

双葉支会は、各学校での状況が異なっています。生徒も激減、教職員も加配は講師がほとんどです。震災前と激変の生活環境です。現在の子供たちは震災時のフラッシュバックでなく、フラッシュフォワードが課題ととらえます。将来が見えない、将来がこわいなど。心が安定してなければ、運動はできません。運動で心を安定させることは可能です。校長は、リーダーシップをもって取り組んだり、外部との連携や交渉がしたりすることが大事です。メディアに関しても食に関しても幼小中で取り組むことが大切であり、今回の健康・体力・安全教育の重要性は、新学習指導要領の総則にも明記されています。

第5分科会(進路指導)未来を切り拓くためのキャリア教育の視点に立った進路指導の充実

【発表者】	田村市立都路中学校	田中 淳一
【司会者】	田村市立滝根中学校	吉田美智生
【記録者】	本宮市立白沢中学校	金成 智子
【運営委員】	三春町立三春中学校	佐藤 和典
【進行係】	浪江町立浪江中学校	嶋原 俊洋
【会場係】	白河市立表郷中学校	石川 政彦



1 発表の概要

田村支会

田村市立都路中学校

田中 淳一



テーマ：「基礎的・汎用的能力を育成するキャリア教育の充実と学校組織マネジメントの在り方」

◇研究の趣旨

Society5.0（超スマート社会）の到来によって、人間としての強みはどこにあるか。学びや仕事にどのように向き合っていけばよいか。このような本質的な問いが学校教育においても改めて問われている。各学校において「未来を切り拓くためのキャリア教育の視点に立った進路指導の充実」を図る目的とは、Society5.0の中でも人間らしく豊かに生きていくために必要となる資質・能力を確かに育成することにあると、田村支会では定義した。

◇研究の方向と視点

生徒一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる基礎的・汎用的能力を育成するキャリア教育の充実を図るため、校長としての学校組織マネジメントの在り方について4年計画で研究実践を進めることとする。学校組織マネジメントにあたっては、次の3つの視点を大切にすることとした。「視点1：変える（教職員一人一人が変えることの必要性を理解し、難しさを克服して、学校を変える主体としての役割を果たす）」、「視

点2：見つける（学校の強みを生かす方法や、弱みを強みに変える方法を工夫する。学校の有する資源を見つけ出し、活用・開発する）」、「視点3：つなぐ（チーム学校への変革）」

◇研究計画と方法

1年次から4年次までの各年次の研究計画と方法を検討、策定

◇1年次の研究の概要

1年次は、各学校のキャリア教育に関する取組の現状・実態及び要因の把握、及び改善策の検討を行うこととし、田村支会の全中学校9校を対象としたアンケートを実施した。アンケート結果をもとに現状・実態を分析するとともに、キャリア教育の推進に関する課題認識についても明らかにし、それらをもとに、次のとおり改善策を設定した。

- ア キャリア教育に関する研修の計画と実施
- イ 具体的な目標（資質・能力）の設定と共有
- ウ 教科等の意義の認識を深められる方策の設定と推進
- エ 社会に開かれた教育課程とカリキュラム・マネジメントの推進
- オ 保護者や地域社会等との協働体制・関係の構築

◇これまでの成果と課題

◇都路中学校における取組事例及び学校組織マネジメントについて

- ・都路志塾〔改善策エ・オ関連〕
- ・都路アカデミア〔改善策イ・オ関連〕

2 質疑

特になし



3 協議内容

田村支会における5つの改善策ア～オのうち、取組事例について発表のあった3つの改善策を除く、「ア キャリア教育に関する研修の計画と実施」及び「ウ 教科等の意義の認識を深められる方策の設定と推進（各教科におけるキャリア教育の進め方）」の2点について協議することとする。

◇ キャリア教育について、校長も含め教員がよく理解していない実態があるのではないかと。学校教育そのものがキャリア教育である、言い換えると学校経営そのものがキャリア教育であるとの認識に立たなければならない。校長が校内研修の場で説明するとともに、それを教員、生徒が意識するようにしていかなければならない。

◇ 教職員の意識を変えるために、文部科学省のパンフレットを活用している。また、キャリア教育のアンケートを11月に実施し、その集計結果を踏まえ学年ごとに1年後に目指す生徒の姿を検討し、次年度の重点目標を設定するようにしている。

◇ 各事業(取組)の継続性がなく、単発の事業となっているのが現状である。→ 目的が明確になっておらず、方法が目的になっているのではないかと。クラスごと、学年ごとの実態を踏まえた授業とする必要があり、ビジョンを明確にすることが大切。

◇ 事例：生徒及び保護者を対象とした2020年度県立高校入試説明会において、校長がキャリア教育について説明する機会を設け

ている。学年主任による入試改革の説明の後、校長がキャリア教育について説明し、それを踏まえ大学教育がどのように変わるかを説明している。

◇ 事例：アントレプレナーシップの取組事例について紹介。

4 まとめ

三春町立三春中学校 佐藤 和典

第5小主題である「未来を切り拓くためのキャリア教育の視点に立った進路指導の充実」の各文言(言葉)に注目して考えてみたい。

まず、「切り拓く」べき「未来」とはどのような世界かということ。東大ロボくん、AIがその道のプロに勝つ、2045年問題といったことが取り沙汰されており、Society5.0社会の入口に立っている。そのような社会に生きる子どもたちに対し、未来を切り拓く力を身に付けさせていくため、校長としてどのようにマネジメントしていけばよいかという視点を明確にし、研究を推進していくことが必要である。

次に、「キャリア教育の視点に立った」という部分について、キャリア教育とはどのような教育かを再度確認する必要がある。「基礎的・汎用的能力」として提示されている4つの能力について改めて確認するとともに、「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」になった際に重視された内容やポイントを踏まえた指導が求められる。また、各学校においては、それぞれの学校・地域等の実情や各校の生徒の実態を踏まえ、育成しようとする能力の到達目標を定めてきたかどうかの自己点検は不可欠であり、発表にもあったように、育成する力、ねらいを明確にすることが重要である。価値観をどう育てるかも考えなければならない。

最後に、今後研究で確認したい点についてまとめることとする。

第6分科会(生徒指導)自他の生命を尊重し自己有用感を育む生徒指導の充実

【発表者】	伊達市立松陽中学校 相馬市立中村第二中学校	佐藤政俊 佐藤恭司	会津若松市立湊中学校	佐久間一晃
【司会者】	桑折町立醸芳中学校 相馬市立磯部中学校	大木 修 本間義和	磐梯町立磐梯中学校	吉田ひとみ
【記録者】	いわき市立入遠野中学校	川上一美		
【運営委員】	伊達市立伊達中学校 南相馬市立原町第一中学校	鈴木昭夫 梅田善幸	会津若松市立第三中学校	歌川哲由
【進行係】	三島町立三島中学校	佐藤 昭		
【会場係】	郡山市立三穂田中学校	家久来三典		

1 発表の概要

(1) 伊達市立松陽中学校 佐藤政俊

伊達地区では不登校生徒数が増加傾向にある。社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てるためには不登校傾向の改善への取組が必要である。

研究の方向と視点

不登校児童生徒への支援の在り方（文科省通知）による基本的な考え方の共通理解と、援助チームシート（県教委）の4つの側面を踏まえた組織的・継続的なアプローチ

視点1 組織的に取り組む校内体制づくり

- 校務分掌に不登校担当教師を位置づけた。学級担任の負担が軽減し、生徒の健康面・情緒面の変化への迅速な対応が可能となった。
- 生徒指導委員会の役割をフローチャート化した。トラブル対応策、指導方針について保護者理解が進み、生徒の情緒面が安定した。

視点2 実効性のある指導と関係機関との連携

- SCが生徒指導委員会へ参加、全生徒と面談した。SSWRを含めたケース会議や家庭訪問、保護者に適応指導教室等の活用を促すなどの働きかけが効果的であった。
- 中1不登校の未然防止をめざし、家庭環境、発達障がい等について入学前から小学校と情報交換を行った結果、出現率が抑えられた。

研究の成果

関係機関への積極的な働きかけ、4つの側面からのアプローチが有効である。



(2) 会津若松市立湊中学校 佐久間一晃

各校の実態・問題点を抽出し、支会として視点1～3に分類した上で、校長としての指導と支援の在り方を明らかにした。

研究の方向と視点

視点1 ①自己有用感の高め方

- QUテスト結果の分析活用を学校経営ビジョンに示した。
- 生徒の内面を把握するため、調査やQUテストからの個別データを活用している。

視点1 ②部活動運営・保護者との関係づくり

- 部活動統廃合の理解に向けて生徒、保護者、地域と丁寧な話し合いを進めている。
- 顧問会で部活動の意義、方針や取組について確認し、学校だよりで紹介している。

視点2 ①不登校、いじめ防止等への取組

- チーム意識、フェイス to フェイスを指導・人権尊重・いじめ防止に関する式辞や講話

視点2 ②SNSトラブルへの対応

- 適切な対処について教頭、生徒指導主事への指導助言と外部専門家のコーディネート

視点3 家庭・地域・関係機関との連携

- 最も効果的な機関との連携を進める。
- 地域社会への情報発信を促進する。

研究の考察

今年度の成果と課題を研究集録にまとめ、2年次の研究に生かしていく。

(3) 相馬市立中村第二中学校 佐藤恭司

東日本大震災、原発事故の影響による現状と課題は地域によって大きく異なる。地域の実情に合わせ、各校での実践課題を明確にした上で視点に基づき取り組んでいく。

研究の方向と視点

視点1～3を踏まえた取組

- いじめ根絶宣言(カード)に自署し携行
- 小中連携で「スマホ使い方宣言」、「使わせ方宣言」を策定
- 毎月1日を情報モラル確認日とし、スマホ等の使い方を親子で確認

研究の考察

校長には校内指導体制の組織化、関係機関との連携、めざす方向性についての判断力・実践力が求められている。

2 質疑

(1) 不登校対応について

- ◇ (宮城中) 不登校担当教諭を置いたことで全員で取り組む体制ができた。
- ◇ (二本松三中) 市担当者、SC、SSWRが参加するケース会議を経て医療機関とつないでいる。

(2) 部活動統廃合について

- ◇ (船引南中) 小学校段階で希望を調査し、スポーツ少年団等の指導者にも会議に参加してもらい理解を促す努力が必要である。

(3) 自己有用感の低さの実態把握・QUテストから不登校生徒を見極めた事例

- ◇ (郡山七中) 全国学力・学習状況調査、QUテストの結果から実態把握をしている

が、データに表れない不登校事例もある。

(4) 関係機関との連携事例

- ◇ (浪江中) 市主体の会議を開き、生活困窮家庭等に対して関係機関が迅速に対応した結果、解決が図られた事例がある。

3 協議内容

校内体制・関係機関との連携について

- ◇ (平野中) 対処ではなく不登校の原因から未然防止の在り方について校長の関わりを探っていくことが大切であろう。
- ◇ (松陽中) 未然防止には小中並びに外部関係機関との連携が不可欠となる。
- ◇ (川俣中) 町雇用SSWRと行政機関が連携した結果、迅速な対応が図られた。
- ◇ (磐梯中) メディアコントロールのルールを小・中学校と町が連携して策定している。



4 まとめ

(1) 伊達市立伊達中学校 鈴木昭夫

不登校の増加傾向改善には、日々の実践を検証、改善していくことが大切である。学校との関係を切らさず、社会的自立をめざす進路指導、予防的な取組を推進していく。

(2) 会津若松市立第三中学校 歌川哲由

自己有用感を育むためには積極的な生徒指導の在り方をめざすべきである。学校教育目標に位置づけ自己肯定感、自己達成感を実感させ自己有用感をもたせることが自信につながっていくと考える。

(3) 南相馬市立原町第一中学校 梅田義幸

自校の課題の明確化、ビジョンの提示と重点化を図ることが肝要である。多様な意見や方法を見い出すためには校長の積極性とコーディネートのもと関係機関をつなぐ、小・中高の連携と共助が必要である。

第7分科会(教職員研修)多様化・複雑化した学校教育課題に対応できる教職員の育成

【発表者】	須賀川市立仁井田中学校	湯田公夫	南会津町立南会津中学校	小林 稔
【司会者】	天栄村立天栄中学校	佐浦雅明	下郷町立下郷中学校	長沼敬貴
【記録者】	福島大学附属中学校	菅野浩智		
【運営委員】	須賀川市立第二中学校	高崎則行	南会津町立立田島中学校	馬場俊忠
【進行係】	南相馬市立鹿島中学校	渡辺亮恵		
【会場係】	郡山市立逢瀬中学校	小林和文		

1 発表の概要

(1) 岩瀬支会の取組について

須賀川市立仁井田中学校 湯田公夫

本支会では、実践研究と調査研究に取り組んだ。実践研究では「研究の手引き」にある3つの視点から学校ごとに1つを選択した。A校では、人事評価制度を活用した。面談等で、学校経営における校務分掌を確認させ、その任をしっかりと担うためにはどのような研修が必要なのかを考えさせた。B校では、ミドルリーダーの育成のために、若手教員を主任に登用したり各種関係機関との折衝の機会を意図的に設定したりした。実践研究は緒に就いたばかりだが、学校経営グランドデザインとの関連で自己目標を設定できる教員が増えている。調査研究は、校長と教員を対象に「研修」に関する意識調査を実施した。調査項目は「伸ばしたい資質・能力」「有効だと思われる研修方法」「校長に期待する関わり」である。調査結果を踏まえ、今後、校長として何ができるかを模索し、教職員を育成していく必要がある。

(2) 南会津支会の取組について

南会津町立南会津中学校 小林 稔

本支会は、新採用教員が多く指導力向上は不可欠である。また、大量退職を考えると人材育成は急務である。そこで、視点(3)に焦点を当て、人事評価制度

を手立てに研究を進めた。A校では、自己目標を教育目標との関連、具体性の視点で設定させ、期首面談でその達成に向けて主体的に取り組めるよう助言した。教員の自己目標は常に確認できるように一覧表にし、授業参観後の指導助言等に活用した。B校では、昨年度の課題を踏まえ具体的な自己目標を設定するよう話し、学校経営ビジョンとの整合、具体性の観点で教頭が確認した。校長面談では、取り組むべき内容が明確か、目標達成の過程で各自の特性が生かされているかを確認し、最終的な自己目標を設定させた。研究成果としては、面談時に学校経営方針等を直接話すことで全体で取り組むべき内容が共有できた。教員の協働的な姿が多く場面で見られるようになった。人事評価制度の効果的な活用、十分な面談時間の確保は今後の課題である。



2 質疑

(1) 岩瀬支会の取組について

◇(喜多方二中より)人事評価制度における面談時間はどれくらいか。また、先生

方はどのように変わったか。

答 一人20分である。昨年度の中間面談時に、期首面談の内容できていないところを確認し、取組を促した。学校グラウンドデザインにおける自分の立ち位置に気づくようになっている。

◇（喜多方二中より）校外研修に魅力を感じている教員が多いようだが、その要因は何が考えられるか。

答 校内研修に魅力がないのではないかと。得るものがなければ意味がないと思う。

◇（矢祭中より）人事評価制度と研修をどうやって結びつけるのか。

答 1人1つ、自分で選択して研修会に参加するよう促している。研修情報を校長が持ち、先生方に示すようにしている。

（2）南会津支会の取組について

◇（天栄中より）面談記録ノートはどのようなものか。記録をとるときに「授業」「部活動」など項目立てはしないのか。

答 授業参観での感想を記録している。前年度と比較しながら記入しているので、面談時に具体的に話ができる。

項目立ては特にしてはいない。

◇（喜多方二中より）協働意識が高まったのはなぜか。

答 年齢構成、僻地派遣教員の加入など、様々な要因が上手く絡んでいるようだ。

3 協議内容

（1）人材育成の工夫について

◇（白河二中より）校務分掌は主担当と副担当で組むようにしている。主担当は副担当に助言する。副担当は、はじめはミスがあっても頑張っている、ミドルリーダーの育成につながる。

◇（喜多方二中より）本校では経験の浅い先生を現職主任や生徒指導担当にした。不明な点は年配の先生方に助言を求めている。職員間交流が活発になっている。

（2）人事評価制度の活用について

◇（仁井田中より）週案に人事評価シートが綴じてある。常に見ることができるし、コメントも入れやすい。

◇（柳津学園中より）学校の強みと弱みを全職員で洗い出し、それに応じた手立てを立てている。ビジョンが作りやすく先生方の意見が反映されるので、資質能力の育成につながる。

◇（須賀川二中より）面談時間の少なさを補うために、授業を参観して助言したり、週案にコメントを記入したりしている。

4 まとめ

（1）南会津町立田島中学校 馬場俊忠

人事評価制度を人材育成にいかにかかしていかを考える必要がある。面談のキーワードは「フィードバック」と「対話」である。これが先生方には一番プラスになる。調査結果から、研修の考え方に管理職と先生方の間にずれがあるが、当然のところもある。何に重点を置いて校内研修をするか、教科の違いを超えた研修、学校課題を踏まえた研修でありたい。

（2）須賀川市立第二中学校 高崎則行

学校経営グラウンドデザインについて、学校の最優先課題やその取組をわかりやすく職員に話すことが大切である。「仕組み」に手を打つことが必要である。発表にもあったが、主担当と副担当を組み合わせるなどの校務分掌上の工夫など模索してほしい。教師としての意識が希薄でないかという報告があった。意識は実践でしか高まらない。先生方が育つ機能が失われていないか確認してほしい。



第8分科会(経営課題)地域との連携・協働による「チーム学校の創生」

【発表者】	会津美里町立本郷中学校	藤田信一	いわき市立湯本第一中学校	小泉俊夫
【司会者】	会津美里町立高田中学校	武藤成也	いわき市立小名浜第一中学校	橋谷田聡
【記録者】	喜多方市立会北中学校	佐藤信昭		
【運営委員】	坂下町立坂下中学校	板橋健一	いわき市立小名浜第二中学校	大和田一成
【進行係】	南会津町立舘岩中学校	菊池博基		
【会場係】	郡山市立守山中学校	佐藤士郎		

1 発表の概要

(1) 両沼支会

「外部人材とのより効果的な協働体制の構築」について

会津美里町立本郷中学校 藤田信一

チーム学校を構築するには外部人材を活用することが不可欠である。人材には公的・社会的組織に依頼しての人材と個人の人的ネットワークを駆使しての人材が考えられる。

外部人材を活用する際は、任せっぱなし(丸投げ)ではなく学校教育上のねらいを・意図を明確にし、きちんと打ち合わせを行い、学校と外的人材の役割を明確にすることが必要である。校長は、各段階での進捗状況を的確に把握しなくてはならない。

(2) いわき支会

「教職員の専門性を高め、組織力を高める学校経営の在り方」について

いわき市立湯本第一中学校 小泉俊夫

チーム学校を構築する際、SC、SSWRなど専門的人材との協働が重要ではあるが、日々教育活動に携わっている学校職員の専門性が向上すれば、いっそう協働連携を効果的に進めることができる。実際の学校現場では、校務分掌に基づいて行われる会議に上記の専門知識を持った人材が加わることが事例としてあげられている。校長はこれらを組織活性化と職員のスキルアップの視点から計画的に進めなければならない。

2 質疑

(1) 「外部人材とのより効果的な協働体制の構築」について

◇(尚英中より) 外部人材を教科学習に利用したことはあるか?

公的組織の人材活用としては〇〇教室などのイベント的なものが多く、地域人材の活用としてはゲストティーチャーという形が多い。夏季休業中の学習支援の事例もある。

◇(中島中より) 生徒は外部人材をどう受け止めているか? また謝礼は?

生徒に与えるインパクトは大きく、良い動機付けになっている。謝礼についてはケースバイケースである。各種事業の補助金を利用できるケースもある。



(2) 「教職員の専門性を高め、組織力を高める学校経営の在り方」について

◇(中村中より) SC、家庭相談員との予定調整はどうしているか?

時間割に位置づけており、家庭相談員の施設も直近なので全員集合が可能である。

◇(猪苗代東中) 実際の効果としてはいかがか?

不登校数の減少は見られないが、千差万別の原因についてはよりきめ細かく対応できている。

3 協議内容(事例・情報交換を中心として)

(1) 外部人材との協働態勢づくりについて

- ◇ 職員の人的ネットワークを用いて人材を確保した。人間関係が出来ている人だと効率的。
- ◇ 事前に生徒の様子、学校が意図していることを伝える打ち合わせ時間を確保している。
- ◇ 打ち合わせ時間の確保がきつい場合は、同一人材を活用した他校からの情報収集も良い。
- ◇ 熟練を要する事案で、人材の老齢化が進んでいる場合、後継者を確保することが大切。

(2) 外部人材を利用した会議の開催時間の確保・校務分掌への位置づけ

- ◇ SCが入れないとしても管理職や養教が対策会議の中身を必ず伝えている。
- ◇ 今年度、新しい分掌として「地域交流係」を設置して分担を明確にした。

(3) 人材確保の方策

- ◇ 福島市は各地域の学習支援センター、公民館への相談が効果的である。
- ◇ ゲストティーチャーは公民館の講座の講師を頼むことも出来る。
- ◇ 教委による人材登録が始まっている。多くの人材を集約できるように協力していきたい。
- ◇ 学校地域支援本部事業の利用も効果的である。
- ◇ 最低限、旅費と保険の整備は必要ではないか。

4 まとめ

(1) 坂下町立坂下中学校 板橋 健一

- ① 外部人材は活用すべきだが必要性、

人間性、色々な面で吟味が必要である。専門家なら良い授業をするものと考えがちだがこれは誤解である。

- ② 無料の外部人材を利用するのもよい。弁護士（申し込みは即時で）、生徒指導アドバイザー（教師向けに活用）、企業のCSR社会貢献活動等がある。
- ③ 総合的な学習は3年間を通したビジョンを明確にすること。
- ④ 部活動指導者については事前に学校の姿勢を明確に伝えること。トラブル未然防止と処理は校長の責任である。

(2) いわき市立小名浜第二中学校

大和田 一成

- ① 不登校事案への対応は担任任せにしないこと。専門知識を持ったSCやSSWとチームとして対応すること。
- ② 『地域人材の活用』と聞いたとき、職員に「また忙しくなるのか」と思わせないこと。
- ③ 基本は校長自身が持つ人的ネットワークである。自ら汗をかくという覚悟が必要。
- ④ 最も大切なことは、校長のもつビジョンをきちんと職員に示して共有化することである。校長は部下を動かすのが仕事であるが、部下に校長がきちんと認められ信頼されているのが前提である。
- ⑤ トップダウンを基本としても、職員に任せ育てることが大切である。(分散的リーダーシップ)



写真記録(開会行事)



写真記録(分科会)

【第1分科会】



【第2分科会】



【第3分科会】



【第4分科会】



【第5分科会】



【第6分科会】



【第7分科会】



【第8分科会】



県中県南大会を振り返って

これまでを振り返ると、平成19年度小・中学校長会合同で開催された二本松大会以降、郡山市が会場となった平成21年度全日中福島大会、平成23年3月の東日本大震災及び原発事故により平成23年度会津大会は延期され、翌年震災後の対応を特別分科会を設けて実施した平成24年度会津大会、さらには、平成26年度の東北地区中福島大会と、共通主題に基づく県単独の研究協議会は、8年間開催されていませんでした。平成28年度、9年ぶりの県大会「浜」開催を「いわき大会」として引き受けていただき、これまでの研究協議会の運営計画や記録等の資料が不足する中、実行委員会を立ち上げ、協議を重ねながら、いわき支会一丸となって大会開催にご尽力いただきました。

本年度は、「いわき大会」の成果を引き継ぎ、「福島県中学校教育70年記念式典」及び「第46回福島県中学校長会研究協議会県中県南大会」が石川町母畑温泉八幡屋を会場として開催されました。岩瀬支会、石川支会の校長先生方を中心に、県中県南の校長先生方が、前年度から緻密な運営計画の下、一丸となってご尽力いただき、成功裏に終了することができたことに感謝申し上げます。

大会当日は、福島県中学校教育70年記念式典を、福島県教育委員会教育長の鈴木淳一様をはじめ、歴代の校長先生方、関係各位をお迎えし、県中学校長会全会員が一堂に会した中で、盛大に執り行うことができました。記念講演として、郡山市教育委員会教育長の小野義明様にご講演をいただきました、また、午後には大会主題「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」のもと、8分科会による小主題に基づく各支会の質の高い研究発表及び熱心な研究協議が行われました。生徒たちの「これからの社会を生き抜く力の育成」に向け、「校長としての在り方、関わり方」等を協議することができた実り多い大会となりました。

大会成功に向けてご尽力いただいた分科会研究発表者である各支会研究担当の校長先生方、そして、県中県南の実行委員会の校長先生方をはじめ、関係の皆様にご感謝申し上げますとともに、本大会が今後の県校長会協議会の発展に寄与することを祈念してあいさつとします。ありがとうございました。

福島県中学校長会研究部会長 安齋 康仁（福島市立清水中学校）

第46回福島県中学校長会研究協議会県中県南大会

発行日 平成30年11月30日

編集 県中県南大会実行委員会研究部

製本 円谷印刷（須賀川市加治町8-6）